APU

立命館アジア太平洋大学

PROGRESS REPORT

[季刊] 立命館アジア太平洋大学プログレス・レポート　1999年 春 第9号

vol.9
SPRING 1999

立命館アジア太平洋大学への期待

財団法人 新国立劇場運営財団理事長
元文部事務次官
木田　宏

創立百周年とともに二十一世紀の幕開けを迎える立命館大学が、次の百年を目指して、その名もアジア太平洋大学を設置しようと意図しておられることに、心からの期待を寄せるものであります。

わが国は、アジア大陸から程よく離れて、諸文明を取捨選択できる恵まれた地理的環境にありますため、古くは中国の優れた文化を吸収し、近くは西欧の文明に学んで、近代国家の基盤を支える独自の文化を形成することが出来たと考えます。過去百年にわたる立命館の歴史は、わが国の近代国家としての成長の歩みに即応し、それを支えて来たものであったと言えましょう。

近代国家の建設も、その基盤を支える文化の向上も、所詮、それぞれの国民が教育に

よって学びえた成果に他なりません。教育によって学びえた人々の力量が、それぞれの国の発展を促す力となり、文化、文明の進展をもたらしてくれます。それ故、教育わけても高等教育の果たす役割は誠に大きいものであると考えます。

然し、わが国がこれまで築き上げてきた文化は、島国であるというわが国の地理的環境に支えられたため、優れた少数の指導者によってもたらされた美しい華に飾られたものであったと言えましょう。この島国の人々が、他国へ出掛け、他の国々の人々との交わりの中に持ち込んで生み出したものは、近年まで極く少なかったと考えます。

今二十一世紀を迎えようとするとき、二つの世界大戦を経て、飛躍的に発展した人間の知識、技術、行動力の拡大は、我々が島国に安住してきた社会的環境をすっかり覆そうとしています。もはや島国に籠もって、他国の華を愛でるのみという生活は許されなくなりました。

諸国民との交わり、諸民族との共存共栄の中に、わが国の文化技術を磨いて行かなければなりません。わが国の教育のなかに、分けてもわが国の大学の中に、それを育てる環境を作って、わが国の国民に新しい資質を養い、他国の人々にわが国の文物を知ってもらう必要があります。

その意味において、立命館大学が、「立命館アジア太平洋大学」を設立し、そこにアジア太平洋の地域から多数の学生を招いて、わが国の青年たちとともに生活を共にし、共存共栄の学習環境を作ろうとされることは、誠に大きな歴史的意義を持っていると、期待を膨らませているのものであります。

■来春の開学に向けて

立命館アジア太平洋大学 文部省設置認可審査

――第一次審査が終了し、第二次審査へ

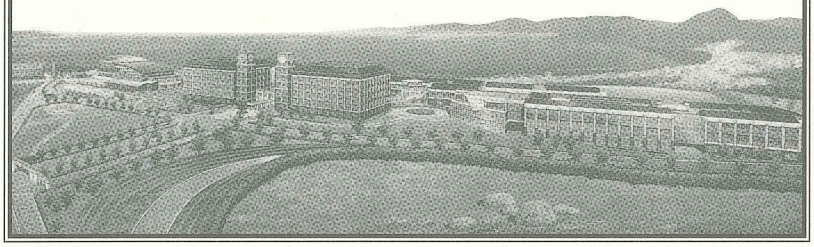
慈道 裕治 常務理事（立命館アジア太平洋大学副学長予定者）に聞く

すでに「プログレス・レポート」第七号（一九九八年秋号）で、ご報告させていただいておりますように、昨年九月末に文部大臣へ立命館アジア太平洋大学の設置認可を申請しました。その後、文部大臣の諮問機関であります「大学設置・学校法人審議会」におきまして、立命館アジア太平洋大学の基本構想を中心に審査が行われてきました。

去る二月十五日に文部省高等教育局長より、新大学の基本的枠組みにつきまして承認を得た旨の通知を受領しました。このことにより、来春、二〇〇〇年四月には二学部を有する国際的な大学として設置できますことが確実となりましたことをご報告させていただきます。

●開学までのスケジュール

1999年	4月	シンボルマーク使用開始
	6月	文部省申請追加書類提出
	7月	高等教育シンポジウム開催
		第2回アジア太平洋懸賞論文・作品大賞　募集開始
	12月	設置認可（予定）、建物竣工
2000年	1月	現地においてAPU体制確立
	2月	入学試験実施（予定）
	4月	開学、入学式



■開学を1年後に控えて

慈道裕治 常務理事
（立命館アジア太平洋大学副学長予定者）

Q 立命館アジア太平洋大学（ＡＰＵ）開設を社会的に発表して以来三年七ヶ月。開学を一年後に控えた現時点においての最重要課題は何でしょうか。

A やはりなんといっても留学生の受け入れです。これまで各国に教職員を派遣し、高校等の教育機関との協議を重ね、学生推薦の協定を締結してきました。今後はいよいよ協定機関の協力を得て説明会を開催する時期にきています。韓国・中国・インドネシア・タイ・マレイシアを皮切りに、今後主要国において説明会を開催する予定にしています。

すでに開催した説明会では、教育内容とともに、学生生活や日本への入国など、きわめて具体的な質問が出されています。これらの質問に的確に答えていくことでＡＰＵへの信頼を高めていくことが、留学生受け入れの面でも重要になっています。また、そのことを通して、教育や学生生活の準備をより万全なものにすることにもなります。

Q ＡＰＵにおける新しい教育システムの中でも特色ある二言語教育システムにより、学生はどのような力を身につけるのでしょうか。

A ＡＰＵは学生の約半数が留学生、教員も約半数が外国籍という「マルチカルチュラル・コミュニティ」です。このような国際的教育環境を生かし、日本語および英語の二言語による教育を行います。一・二回生時には、ほとんどの科目が日本語と英語の両方で行われます。入学試験を日本語で受けた学生は、三回生時にはＴＯＥＦＬ五百五十点レベルの英語力を到達目標とし、一方英語で入学した学生は、日本語能力試験一級を到達目標としています。つまり、全ての学生について二年間でバイリンガルとなることを目指しています。

マルチカルチュラル・コミュニティとなるＡＰＵキャンパスでの学生生活・学生相互のコミュニケーションの基礎が、二言語教育システムであると言えます。

Q これまでにない壮大な構想ともいえるＡＰＵの開設事業が、さまざまな課題がありつつも着実に進捗してきた要因は何であると考えていますか。

A それは何よりも、私どもの構想と計画に対して、各界の皆様から期待と共感、そしてご支援をいただくことができたことです。私自身、国内外問わずさまざまな場面で実感しておりますことは、ネットワークのもつ偉大な力です。アドバイザリー・コミッティ、アカデミック・アドバイザー、サポーティングメンバー、海外の協定大学・高校など、ＡＰＵの構想にご賛同ご支援いただいている多くの皆様方の存在は、何にも代え難いＡＰＵへの信頼の証として開設事業推進の大きな支えとなっています。

Q 二〇〇〇年四月にはいよいよ学生を迎えることになります。開学後を見越し、重視しなければならないと考えていることは何ですか。

A 開学はひとつの節目ではありますが、大学のこれからを考えた時には通過点にすぎません。開学がまさしくスタートであり、そこからが真価が問われる時です。

来春には学生がＡＰＵキャンパス、そして別府市で生活をはじめます。そこで重要なことは別府市をはじめとする地元の皆様方とＡＰＵがこれまでにないような協力関係を築いていくことです。現在協議を進めておりますが、地域と大学の新しい関係づくりを進めてまいりたいと考えています。

海外における説明会での生徒・父母からの熱い眼差しと数々の具体的な質問、日本の高校生を対象に開催している高校生ＡＰＥＣで発表する生徒の姿。それをまのあたりにした時、私どもの構想が日々実現に向けて進んでいることを実感するとともに、責任の重大さを改めて認識し身の引き締まる思いがいたします。

若者達の大志が開花する場としてＡＰＵが誕生・成長できますよう関係者一同全力を尽くしますので、引き続き皆様方のご支援ご協力のほどお願い申し上げます。

立命館アジア太平洋大学のシンボルマーク決定

開学一年前となる九九年四月をめざして検討が重ねられてきたＡＰＵのシンボルマークがこのほど完成し、四月一日より使用を開始しました。同シンボルマークは、昨年の初夏から約半年間の検討のうえに、十二月末、学園役職者によって構成される審査委員会において採用デザインが決定し、校名のロゴタイプを加えて完成させたものです。

デザインは、富士通・ファミリーマートなどのシンボルマークを手がけたデザイナーの原田進氏によるものです。

立命館アジア太平洋大学のシンボルマークは、略称を「ＡＰＵ」と定め、これをベースに、二十一世紀のアジア太平洋を象徴する躍動感あるイメージ、アジア太平洋からの発信を連想させる波のモチーフをデザインし、立命館の歴史と伝統を受け継ぎファミリー性をアピールする同じエンジ系のカラーを使用、太ゴチックのフォントで世界に広がるダイナミックさを表現しています。

このシンボルマークが、世界中の皆様に愛され親しまれることを願っています。

立命館アジア太平洋大学
Ritsumeikan Asia Pacific University

メッセージ……1

om Ambassadors

2000年4月の立命館アジア太平洋大学（以下APU）の開学まであと1年となりました。
学生数の約半数を留学生で構成することを予定しているAPUにとって、各国駐日大使の方々のご協力ご支援は大きな支えです。
現在アドバイザリー・コミッティのアンバサダーメンバーとして33名がご就任下さり、
さまざまな形で具体的にご助言ご尽力下さっています。
今号から2回にわたって、駐日大使の方々からのAPUに寄せる期待をメッセージとしてご紹介させていただきます。
あわせて、各国の留学生受け入れ活動の現状もお伝えします。

The Kingdom of Cambodia
カンボディア大使のメッセージ

前駐日カンボディア王国特命全権大使
トゥロン メアリ
Truong Mealy

私は、この立命館アジア太平洋大学プログレス・レポートの紙面をお借りして、一九九九年三月十六日をもって私の日本における外交官としての任務を無事終えたことを謹んで報告させていただきます。

日本の皆様、外国の友人の皆様、とりわけ立命館アジア太平洋大学の優れた方々が、カンボディア王国そしてカンボディア王国大使館のために、さらには、国の復興と再建という困難な時期を迎えている中で、あらゆる分野の教育をもっとも必要としている多くのカンボディア王国の若者に対して差しのべられた、心温まる支援に対し、心からの賞賛と敬意を表したいと思います。これらは、永遠に私の心に留まるでしょう。

私は、美と繁栄を誇るこの日出づる国での四年以上に及ぶ外交官としての経験の中で、ダイナミックな知性と創造力、高度に発展したテクノロジー、揺るぎない経済基盤、そして常に前向きな姿勢を保つ日本がこれからの一千年の間も、あらゆる分野においてさらなる成功を遂げ、国民の安全と平和を実現し得るものと確信いたします。このような有効かつ有意義な取り組みの中から生まれる国際理解と相互発展の一環として開設される立命館アジア太平洋大学は、重要な意味を持つ賞賛すべき教育事業であり、カンボディア王国国民をはじめ世界中の平和を愛する人々から、必ずや高い評価を受け、記憶に留められるものと思います。

カンボディア王国の若者は、法律、健康、教育、宗教、民主主義など、様々な面での発展を維持するために、引き続き励ましと支援を必要としています。このような意味においても、立命館アジア太平洋大学の開設は、これらの若者のために広く門戸を開くものであります。当大学の創立メンバーの方々の寛大な心と支援に応えるためにも、カンボディア王国は立命館アジア太平洋大学への参加と協力を惜しまない所存であります。

from Cambodia

トゥロン メアリ駐日大使在任中の本年2月、学生派遣協定を締結しました。派遣人数は4名です。トゥロン メアリ氏には、今後本国からバックアップしていただくことになっています。

The Republic of India
インド大使のメッセージ

駐日インド共和国特命全権大使
シッダールタ・シン
Siddharth Singh

二〇〇〇年四月に開設される立命館アジア太平洋大学は、日本がアジア太平洋諸国間の関係を深めるべく努力を進めている中で、重要なステップとなるものと考えます。アジア太平洋地域の国々は、地理的、歴史的必然性に伴って、豊かで多様な学識の伝

統を培ってきました。このことは普遍性と地域性のたゆまない相互作用を反映するものです。インドの経験では、知識や理解を共に探求しようとする姿勢を通して築かれる関係は、創造的な生活の活力を生み出すことができるという意味で、調和のとれたものに発展すると確信します。

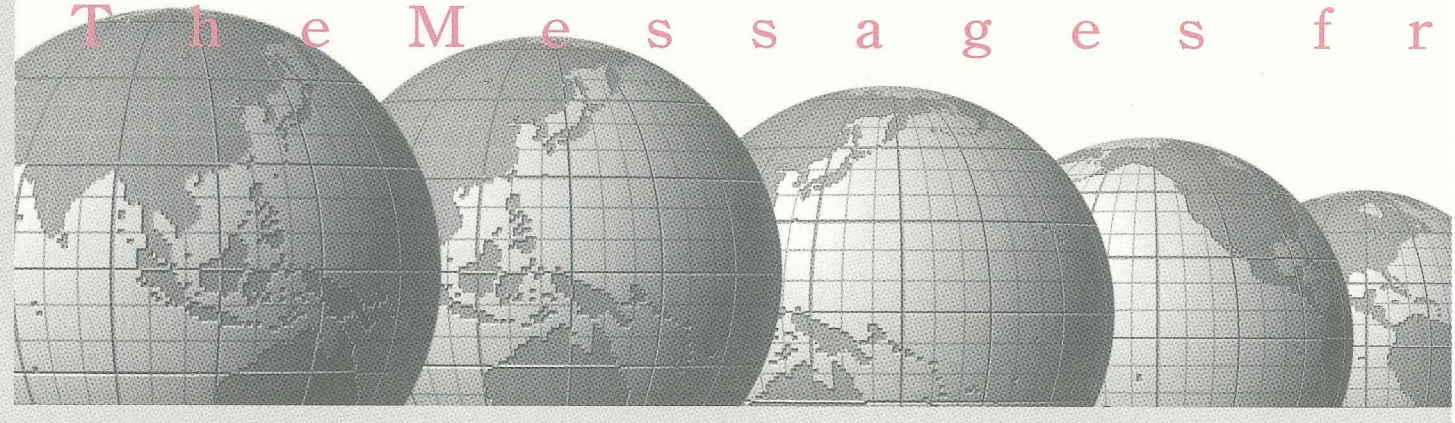
立命館アジア太平洋大学は、諸国間の心理的な隔たりの橋渡しとなる指導者を育成することによって、二十一世紀における一つの重要な課題を遂行するものと考えます。アジア太平洋大学の多数の学生の存在は、アジア太平洋地域の政治的、経済的、技術的、文化的協力関係の発展に重要な貢献を果たすものと確信します。同時に、将来に向けて、若者たちの教育を行うことによって、すべての人々の幸せと繁栄のために肝要となる平和主義、善意と協力の精神を培うことができるものと期待します。

from India

ネルー大学前教授のバルマ博士（インドでの日本研究者の先駆者、初の日印辞典の編纂者）の全面的支援を得て現地活動を展開、この2月にはデリーを代表する名門公立高校4校を含む10校と推薦協定の締結ができました。

駐日大使からの

The Messages fr



The Lao People's Democratic Republic
ラオス大使のメッセージ

駐日ラオス人民民主共和国特命全権大使
トンサイ・ボーディサン
Thongsay Bodhisane

立命館アジア太平洋大学のアドバイザリー・コミッティのアンバサダーメンバーとして招聘いただいたことは大変名誉なことでございます。大分県、別府市および立命館大学によりつくられる立命館アジア太平洋大学は、アジア太平洋地域に貢献する初めての大学となることでしょう。

私は二十一世紀のアジア太平洋地域の調和のとれた持続可能な発展に貢献しようという貴大学の決意表明に共感を覚えております。この目的を達成するため、新大学は将来の指導者や専門家となるであろうアジア太平洋地域および日本からの若者達に、ともに暮らし、学ぶことにより、相互理解を深め、平和、友好および協力を促進する機会を与えるという、積極的な役割を演じなければならないことでしょう。

ラオスにとって、教育は人的資源の発展の中核であります。そして教育の主要な務めは人々の知識を高め、多くの知識人を作ることです。ラオス政府は我が国の社会経済的な発展の必要性および状況を満たすため、人的資源の発展を大いに重要視しております。

私はこの機会に、日本政府および日本の皆様が人的資源の発展を含めた様々な分野でラオス政府に対して貴重な援助を与えて下さったことに、心からの感謝を表明したいと存じます。

毎年多くのラオスの学生が日本政府の奨学金により、日本の様々な大学で学ぶためにやって来ます。私はそのうちの何名かが立命館ア

from The Lao People's Democratic Republic

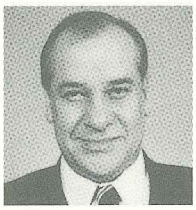
トンサイ・ボーディサン駐日大使との直接交渉の結果、APUに4名の留学生を派遣いただけることで、大筋合意が得られています。現在本国政府で詳細について検討いただいている段階です。

ジア太平洋大学で学ぶ機会を得ることを願っております。

ラオスに対してたいへん関心を持っていただきありがとうございます。

The United Mexican States
メキシコ大使のメッセージ

駐日メキシコ合衆国特命全権大使
マヌエル・ウリベ・カスタニェーダ
Manuel Uribe Castaneda



二〇〇〇年四月の立命館アジア太平洋大学の開学を間近に控え、このプロジェクトのために多大の努力を費やされた立命館大学に対し、深遠なる敬意を表したいと思います。

このような学術機関の設立が、アジア太平洋地域の研究に新たな展開をもたらし、世界各国の学生間の相互関係、とりわけメキシコと日本の関係を深める格好の場となるものと確信します。実際、イベロアメリカーナ大学は、一九九八年十月に立命館大学および立命館アジア太平洋大学の両機関と協力協定を結んでおります。これは、立命館アジア太平洋大学が、アジア太平洋地域における学術交流と高等教育の発展にいかに重要な貢献を果たしているかを如実に示すものです。

このような観点から、私は立命館アジア太平洋大学アドバイザリー・コミッティのアンバサダーメンバーとして、来春から始まるこの大学の多様なプログラムに、わが国の学生も出来るだけ多く参加するよう奨励する所存であります。そして、これらの交流が、メキシコと日本両国の関係に重要な局面をもたらすものと期待しております。

from Mexico

メキシコの著名高校のひとつである「日本メキシコ学院」が、本学附属高校でのホームステイ体験を今夏計画しています。同校では日本語教育も実施しており、APUへの留学生派遣が大いに期待できます。

メッセージ ❶
Messages from Ambassadors

Kingdom of Cambodia
The Republic of India
The Lao People's Democratic Republic
The United Mexican States
The Republic of Singapore
The Republic of Uzbekistan

The Republic of Singapore
シンガポール大使のメッセージ

駐日シンガポール共和国特命全権大使
チュウー タイ スー
Chew Tai Soo

立命館大学は、アジア太平洋地域における未来の指導者を育成するために、二〇〇〇年に新大学を創設するという英断を下されました。アジア太平洋諸国は、現在の経済情勢の悪化を乗り越え、活力を取り戻すものと思います。安定したより良い生活への要求が高まり、諸国の人々の理解が深まるにつれて、大学教育の必要性が増すことになります。これらのニーズに応える意味においても、立命館アジア太平洋大学の開設は、正しく時機を得た素晴らしい取り組みであると言えます。

from Singapore

トミー・コー シンガポール外務省無任所大使がアカデミック・アドバイザーにご就任、多大なるご支援を下さっています。また、シンガポール国立大学、ナンヤン工科大学とは交流協定を締結しました。

駐日大使からの

The Messages fr

The Republic of Uzbekistan

ウズベキスタン大使のメッセージ

駐日ウズベキスタン共和国特命全権大使
アリシェル・シャイホフ
Alisher Shaykhov

諸地域間の相互依存と相互関係が深まりつつある現在の世界において、聡明かつ優秀な学生たちがお互いのネットワークを築くことは肝要であります。英語を駆使することによってお互いを理解し親交を深めることは、学生にとってプラスとなるはずです。私は、立命館アジア太平洋大学が、未来の指導者を輩出し、そのことがアジア太平洋地域に平和と安全をもたらし、相互理解を深めるものと確信しております。

アジア太平洋地域諸国の若者を代表する学生たちが、立命館アジア太平洋大学というひとつの機関において学ぶという素晴らしい構想を実現しようとしておられる立命館大学に対して、深遠なる感謝の気持ちを表したいと思います。

立命館アジア太平洋大学によって主唱される崇高な理念は、国際民主主義、平和、ヒューマニズムの考え方を発展させようと願う世界の若者の抱負に応えるものです。

人類は、まもなく二十一世紀の夜明けを迎えようとしています。このことは、これまでの戦争や紛争、災害、それらに起因する地球上の多くの人々の困窮は、すべて過去のものとして永久に葬られるであろうという希望を我々に抱かせてくれるのです。

我々は、人類の文明の未来とその発展の可能性を、希望をもって見据えることが出来れば、やがては国際平和協力につながって行くはずです。国際社会の真の意味の発展は、世界中の若者との直接的なふれあいを通してのみ可能であると言えます。

立命館アジア太平洋大学創設の理念は、コミュニケーションと人間的なコンタクトが主題となる二十一世紀の課題を反映するものです。その意味において、国際的教育機関としての立命館アジア太平洋大学は、真の意味での平和のシンボルであり、強い絆で結ばれたひとつの大きな家族という素晴らしい世界観を発展させるものと私は信じます。さらには、アジア太平洋諸国の人々の間の相互理解と親交を深めるために、多大な貢献を果たすものと考えます。

このように私は、立命館アジア太平洋大学の設立を心より歓迎し、学生たちが未来の国際社会の発展のために、平和、ヒューマニズム、国際的連帯を築くという崇高な理念に忠実に従うことを切望します。

ウズベキスタン人は、人と出会うと、"Assalomaleykum"と言葉をかけます。これは「あなたの家に平和を」という意味です。「立命館アジア太平洋大学に平和を！」これを新大学創立に向けての私のメッセージとさせていただきます。

from Uzbekistan

昨年9月の駐日大使来学から交渉が具体化し、留学生派遣の窓口であるタシケント大学を紹介いただきました。同大学は日本語の教育研究が進んでおり、すでに基本的には合意し、10名を越える留学生派遣に意欲的です。

「日韓高校教育交流フォーラム」を開催

韓国50高校の校長先生がキャンパスを視察

FORUM

1月22日から24日にかけて、杉乃井ホテル（大分県別府市）において、
「日韓高校教育交流フォーラム」を開催しました。
同フォーラムは、開学が1年後に迫った「立命館アジア太平洋大学」の開学に向け、
韓国および大分の高校関係者が、日韓両国の高校教育の現状と課題を語り合うとともに、
今後の一層強固なネットワークの構築を目指し行われたものであり、
韓国の有名高校50校ならびに大分県下の高校の20校の校長先生など約100名の方々に参加いただきました。
また、フォーラム終了後には、立命館アジア太平洋大学説明会、キャンパス建設地視察などを行いました。

主催者を代表して挨拶する坂本和一立命館アジア太平洋大学学長予定者

二十二日には、「アジア太平洋時代の高校教育の展望」をテーマに「日韓高校教育交流フォーラム」（立命館大学主催／大分県、別府市、大分県教育委員会、別府市教育委員会、社団法人大分県観光協会、別府市観光協会後援／大韓航空・韓進協賛）を開催しました。坂本和一立命館アジア太平洋大学 学長予定者が主催者を代表して挨拶を述べたのち、井上信幸別府市長より歓迎の挨拶をいただきました。続いて、金奭圭駐日韓国大使からのメッセージが紹介され、韓国側からは崔泰祥・景副高校長からご挨拶を頂戴いたしました。

また、大分県と別府市それぞれから、県・市の概況と立命館アジア太平洋大学に対する取り組みが具体的に説明されました。

フォーラムでは、韓国側から李鐘英・大元外国語高校長、金鳳吉・慶南高校長、呂晟九・慶熙高校長の三名が、日本

キャンパス建設地にて

側から原尻正信・大分舞鶴高校長、小山康直・大分高校長と加藤直樹・立命館高校長の三名が問題提起を行いました。

二十三日は、慈道裕治立命館常務理事から立命館アジア太平洋大学の教学内容などについて説明を行い、引き続き、別府の留学生援護会、商工会議所青年部、および国際交流推進協議会から地元の取り組みについて紹介されました。教学内容から奨学金や住宅、国際交流の取り組みにいたるまで、非常に熱心な質疑応答が交わされ、関心の高さと期待の大きさを感じる場となりました。説明会後は、キャンパス建設地へ移動し、伊藤昭常務理事および施設課現地事務所の説明で見学会を行い、徐々に姿を見せつつあるキャンパスを肌で感じていただきました。また翌日は、別府の観光名所巡り等も行い、立命館アジア太平洋大学そして別府市についての理解を十分に深めていただき全三日の日程を終えました。

駐日大韓民国特命全権大使　金 [illegible] 圭 氏メッセージ

このたび、歴史と伝統に輝く立命館大学におかれましては、立命館アジア太平洋大学開設に向け、韓日間の国際教育交流フォーラムが開催されますとのこと、心よりお祝い申し上げます。

このフォーラムを契機として、韓日両国が一層広く深い相互交流と協力関係をもたれ、21世紀のアジア太平洋時代を迎えるにふさわしいパートナーシップを構築されんことを祈念いたします。

韓国からの参加者の声

OUR EXPECTATIONS

■大元外国語高校 李鐘英校長

近くて遠い両国の関係が一つとなり、アジアを主導するプログラムを開発し、共感を形成するためには言語の理解と精神的交流が深化しなければなりません。世界のアジアを先導する名実相伴う指導者を育てることに絶え間なく努力されることを期待します。

■養正高校 嚴圭白校長

多様な文化・歴史・宗教等の特性を持つアジア各国の青少年たちが一つのキャンパスに集まり、太平洋各国の言語を学び合い、異文化に対して心からの理解を深めつつ、またアジア・太平洋時代における各領域の政治・経済・文化等諸問題に関して研究・学習することで、各領域での立派な指導者を育成する大学へと発展するよう期待します。

■世和高校 金泳復校長

国家利己主義から脱皮し、アジア太平洋地域の平和の為に尽くすリーダーを養成するAPUの平和主義教育に期待します。また、韓日両国の学生が共感する問題意識から出発し、問題解決のために協同して探求し、また両国の文化を認め、理解しあうという交流が生まれることを望みます。

■安養外国語高校 朴番淳父兄会長

教育関係者の至大な関心があれば、過去の暗い思考にとらわれない明るく未来志向的な、国家と社会の一分野を担う人材が育成することができ、アジアを一つの共同体として結んで行く主役がAPUより誕生することを期待します。

■明徳外国語高校 崔英姫日本語課長

20世紀が世界を一つに結んでいく過渡期とすれば、21世紀には世界が一つになると言えます。例えば、これからは人間関係においても、どの国の人なのかより、どのような考え方を持っている人なのかによって結ばれるでしょう。今までは「他」と思ってきた外国の異文化に対する理解をより深め、「我」のものとして受け入れるべきだと思います。つまり韓日両国は、今までのような経済的・物理的交流だけでなく、人的・精神的・文化的交流をもっと大切にする必要があります。

■五山高校 金容贊（学生）

APUに留学を希望する学生として、APUが各国の学生達と色々な分野での交流を通じて、世界のためになる事を推進されることを期待します。

■慶南高校 千誠云（学生）

APUが地域社会との交流を活発化し地域ネットワークの構築の先頭にたって活躍されることを期待します。

「デリバリーキャンパス&高校生APEC in九州」開催！

DELIVERY CAMPUS & HIGH-SCHOOL STUDENT's APEC

1999年3月13日（福岡）・14日（小倉）・22日（大分）の日程で、
「デリバリーキャンパス&高校生APEC（Asia Pacific Educative Conference）in 九州」を開催しました。
前半に高校生によるアジア太平洋地域に関する研究発表会「高校生APEC」を、
後半にAPU説明会であるデリバリーキャンパスを行いました。
今回の高校生APECは、昨年11月に立命館大学京都衣笠キャンパスで行われた
第1回に引き続く2回目の開催です。

デリバリーキャンパスでは、立命館アジア太平洋大学の説明に続き、立命館大学教員によるミニ講義が行われました。ミニ講義は三会場とも「アジア太平洋の見方」という共通のテキストを使い、さらにパワーポイントを使用してプロジェクタに資料を投影しながら、授業が行われました。福岡会場は慈道裕治教授（政策科学部）が、小倉会場は荒川宜三教授（経営学部）、大分会場は仲上健一教授（政策科学部）がミニ講義を担当し、それぞれの専門分野に引き付けた講義を行い、高校生に一足早く大学での授業を疑似体験してもらいました。以下に詳しい報告を行います。

ミニ講義を行う仲上教授

福岡会場……三月十三日（土）

天神イムズ八F　GAYA

福岡市を中心とする高校生ら百三十五人が参加。佐賀県や広島県から家族連れで参加してくれた高校生もいました。会場のGAYAは満員となり、立見の高校生が出るほどの熱気に包まれました。福岡会場での発表者は次の通りです。

●立命館高校三年　田村直史ほか二名
「ちぎのそらね」

十一月の京都での第一回高校生APECでの発表を発展させ、今回は南北問題を論じました。どうすれば北と南の融合がはかれるか、高校生らしい柔軟な発想でいくつものユニークなアイデアを提案しました。

●福岡県　筑紫丘高校二年　若松陽子
「生きていく人々」

初めての海外旅行「ベトナム」の体験をもとに、ベトナム戦争の傷跡が街中に残っている様子、また急激な経済成長の蔭にストリートチルドレンなどのようにしいたげられている弱者の現実に触れての衝撃をリアルに語りました。町角で物乞いをする重い障害を持つ人々、親に捨てられ一人で生きていくために通りであらゆる工夫をこらす子供たち。その現実にショックを受けつつも、自分はどうするべきなのか、どう生きていくのかなど、考えたことを語りました。

●福岡県　東鷹高校二年　村上　舞
「イルボンサラムの見た韓国」

韓国に興味を持ち、韓国語も学び、待ちに待った韓国への研修旅行の体験を語りました。同じ高校生同士で交流を行い、互いの意見を率直に交わしあったこと、過去の生々しい体験を持つ年配の人たちとの不安の中での触れ合いを体験して、将来に向けて考えたことなどを述べました。

●福岡県　筑紫女学園高校二年　横溝未歩
「漂着物からアジア」

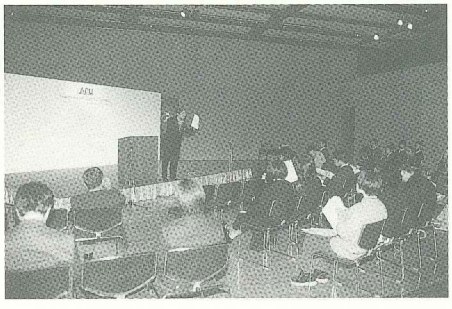
福岡の海岸に流れ着くいろいろなものからアジアを考えました。会場にもヤシの実やジュースの缶、ライター、袋などのアジアからの漂着物をディスプレイしました。アジア太平洋地域の人たちが、互いの風土の違いや文化を理解しながら、共に発展していこうとすることが大切で、それには一人ひとりが互いの国に関心を持つことが重要であり、漂着物からもそのきっかけはつかめる、という意見を発表しました。

小倉会場……三月十四日（日）

ラフォーレ原宿小倉七F　ラフォーレミュージアム

立命館宇治高校の生徒六名が「増えるニューカマー・外国人労働を考える」というタイトル

で共同研究の成果を発表しました。ロールプレイを取り入れ、まず問題提起。その後パワーポイントを駆使し、宇治市や宇治職業安定所、日本語学校への聞き取り調査の結果などをパソコンでプレゼンテーションを行いました。



参加者は五十名。あいにく雨模様となりましたが、中学生や山口県からの高校生も多く参加し、実り多いものとなりました。

■大分会場 ……三月二十二日(振替休日)

大分銀行赤レンガ館二F　大ホール

昨年の「アジア太平洋懸賞論文・作品大賞」の入賞者を代表し、韓国の高校生三名、大分の高校生三名がそれぞれ発表し、その後ディスカッションを行いました。遠くは兵庫県、大阪府、熊本県、鹿児島県などからも参加者があり、熱心に聞き入っていました。

●**韓国　大邱女子高校二年　クォン・ミソン**
～韓国「アジア太平洋懸賞論文大賞」大賞受賞～
「我らの未来のために」
現在の韓国の経済危機脱出のためには、自国の文化を誇りに思うこと、発展的な未来を開く人材を育成する環境を作ること、世界に向かって夢をいだくことが大切だと語りました。「二十一世紀を担う自分たちの努力により、光り輝く時代を作り上げるべきであり、最善を尽くしたい」という高校生らしい前向きな意見を述べました。

●**韓国　富川高校二年　ホン・スンジェ**
「私達は若いのでより力強く未来に向う」

●**韓国　世和高校二年　イ・ユヂン**
「二十一世紀のAPECが進む方向と韓国のビジョン」

●**大分県　別府鶴見丘高校一年　山村佳奈**
「真の援助」

●**大分県　中津商業高校二年　中入茉理子**
「人間として」(詩)

●**大分県　佐伯鶴城高校二年　堺　晶子**
「平和への第一歩」

ディスカッションでは、日韓関係やお互いの国についての印象などをざっくばらんに語りあいました。韓国側からは「日本の若者は、親の世代が築き上げた財産の上にあぐらをかき、努力することを忘れている」「日本の性文化は開放的すぎる」などの辛口の意見も出ました。

韓国からの高校生は、APECの翌日別府市内を見学。APU建設現場見学や別府鶴見丘高校を訪問して交流会などを行いました。

高校生APECでは質の高い発表内容に、来場した高校生から「とても勉強になった」「自分ももっとがんばろうと思う」などの意見が寄せられました。福岡会場の様子は三月十四日の朝日新聞朝刊にとりあげられました。また地元大分会場については、翌日の大分合同新聞、西日本新聞、朝日新聞、毎日新聞での報道に加え、各TV局の夕方のニュースでも放送されました。

『大分合同新聞』(1999年3月24日朝刊)より

心は、はや太平洋大へ

韓国の高校生　建設現場を見学

大分市であった「第二回　職員の説明を聞きながら、姿を現し始めたキャンパス」に参加した、韓国の高校生三人が二千三百、別府市の立命館アジア太平洋大学建設現場を訪れた。三人は、高校生APECin大分」に興味を示していた。訪問したのは、いずれも三年生の李有鎮君（ソウル市）、洪淳在君（富川市）、柳英姫さん（大邱市）と、その父母ら計九人。三人は、立命館大学（京都市）が昨年募集した懸賞論文で上位に入賞し、二十一日から三泊四日の日程で大分に招かれている。

バスで現場を一周した三人は、自然環境に配慮した工事について盛んに質問していた。特に李君は「驚いた現場に、日本人らしさを感じた」と感心。両親が同行する洪君は「この大学が第一志望」と、早くも来年の自分の姿を想像。柳さんは「言語学を学びたいので、世界各地から学生が集まるアジア太平洋大に関心がある」と話していた。

三人はその後、アジア太平洋大設置期成同盟主催の昼食会や、別府鶴見丘高生徒との交流会に参加。市内を散策するなどした。

建設中の太平洋大を見学する韓国の高校生

移動文化交流論
～アジア太平洋の新たなるネットワーク～

ビクトリア工科大学教授（オーストラリア）
アジア太平洋研究センター所長
Kee Pookong
紀　宝坤

心理学博士（オーストラリア国立大学）
アジア地域の移動交流論の第一人者。
オーストラリアを拠点にアジア太平洋地域で実践的研究をすすめ政府に政策提言を行う。

体験的移動交流論

私は、中国南部からの移民の両親のもとマレイシアで生れました。初等教育を中華系学校で受け、英語で教育を行なう高等学校に進みました。その後、オーストラリアのアデレード大学で経済学、政治学と心理学を専攻しました。心理学でオナーズ学位（優等学位）を取得後、オーストラリア国立大学で博士号奨学金を得るまでは、マレイシアとシンガポールで働きました。

こうした私の簡単な経歴を紹介させていただくなかで、私の視点、学問の選択、キャリアそして仕事と居住の選択に大きな影響を与えたいくつかの要因がわかると思います。例えば、早期に中国語と英語の二カ国語を学習した経験は、その当時重要な違いであった英語で教育を受けた華人と中国語で教育を受けた華人の違いを理解することに役立ちました。この違いはマレイシアとシンガポールの華人の価値観と行動を二分し、この影響はいまだに両国において見られます。ある意味でこの違いは、一方で中国的価値やアジア的価値に対するロイヤリティを生み、他方で西洋的・英国的なものへの同化を生みました。

また、この二言語二文化的な遺産は、マレー語が国語として強く奨励されることによって中国語とインド系言語教育への冷遇を伴いました。日々のマレー語、中国語、インド系の言語と文化、そしてヨーロッパ的伝統は、異文化問題への関心と能力を高め、後年の多文化問題への研究と政策の発展のための強力な基盤を提供してくれました。

マレイシア研究の展開

オーストラリアから戻って、はじめての仕事はクアラルンプール近くにある教護院のカウンセラーで、家庭、学校や仕事への適応に問題を持つ少年のケース・スタディーをしました。その後、当時シンガポール大学ブキティマ・キャンパスにあった高等教育開発地域研究所という、東南アジア各国の教育大臣の傘下にあった機関で、研究員となりました。研究員として過ごした一年間は、地域開発協力研究への素晴らしいステップとなり、東南アジア各国からの研究者達との永久の友情を育む機会となりました。

ここでの研究の関心は、スタディー・サービス活動という大学生が農村地域で仕事を体験するプログラムでした。この活動は、その後ラテンアメリカとアフリカの一部で一般的になり、また中国でみられた知識人が地方の農民から学ばなければならないという下方運動にも似ていました。私の研究の焦点はマレイシアにあり、幸運にもクアラルンプールやペナンの農村開発や他の国家開発に関心がある若いマレー人の学者とコンタクトを取ることができました。

マレイシアに関する研究は、マレー系、中国系、インド系コミュニティーの出生パターンに関するものでした。これは、その後オーストラリア国立大学で取得した心理学の博士論文のテーマに関連しています。この研究は、オーストラリア国立大学の奨学金、フォード財団とロックフェラー財団の人口開発計画の支援を受けることができ、マレイシアの三つの主なエスニック・グループ間の出生に対する価値観や行動、特に家族のサイズに関する際立った違いをもたらした心理的、社会的、経済的、文化的要因を調査したものです。

マレイシア半島部の都市と農村の研究は、教育水準、所得、職業、そして他の重要な社会経済的要因だけではマレー人の永続的に高い出生率と華人の低い出生率を説明するには不十分なものであることを立証しました。これらの結果は、ホノルルの東西センター人口研究所の心理学者、社会学者、人類学者そして人口統計学者やミシガン大学とオーストラリア国立大学の学者が組織した「一国を超えた価値および子どもの費用に関するプロジェクト」での研究結果とも一致するものでした。

ハワイ・東西センター人口研究所での経験

一九八〇年、私はハワイの東西センター人口研究所の研究員になりました。この研究所は、アジア太平洋地域における重要な研究教育センターとして活発に活動していた研究機関でした。中国系アメリカ人であるスタンフォード大学法学部教授の理事長就任と日本生まれの中国語能力を持つ韓国人の人口研究所所長への就任は、この研究所が中国との多くの重要な研究協力、特に人口問題の分野での協力を行うことに寄与しました。

しかし、レーガン大統領が就任することによって、ワシントンの新政府は国内外で親出生主義や反人口抑制のスタンスをとるとともに、すぐに人口問題研究への資金を奪いました。このイデオロギーの変化は欧米に限られた訳ではありませんでした。すぐにマレイシアでも、マハティール政権のもと、人口が多いことは

国にとって良いことであるという意見が支持されはじめました。多くの東アジアと東南アジアの国々における急激な経済成長は、シンガポール、香港、台湾、日本、韓国に労働力不足をもたらすとともに、他の諸国を人口政策転換へと駆り立てました。これはアジアのいくつかの国々での家族計画や人口教育機関の改名を引き起こし、エイズなどの他の地球的問題が新しい人口研究のフロンティアとして取って代わり始めました。

ハワイでの滞在は非常に価値のある経験でした。私は幸運にも、東西人口研究所でアジア太平洋地域の多様な社会の研究を行っている多くのアメリカやアジア太平洋地域からの研究者と知り合うことができました。彼らの中にはアジア太平洋地域の言語と文化に関して深い知識を持っている人たちや、彼ら自身の人生において異文化間理解と平和に深く関わりを持っている人たちがいました。ハワイの風景の雄大さ、さまざまな先祖を持つ人々の美しさ、文化的多様性が生み出す活気は、異文化間学習と国際理解と交流の促進にとって理想的な場所でした。私がハワイで体験したような多文化国際教育が、別府湾を眺める丘にたつ立命館アジア太平洋大学で展開されることと期待しています。

オーストラリアにおける多文化研究と政策転換

私は、一九八一年に移民としてオーストラリアへ戻り、オーストラリア政府によって多文化社会を促進するために設置された新しい連邦政府機関・オーストラリア多文化問題研究所の仕事に従事しました。そこでは私のハワイでの経験が大いに役立ちました。研究所での五年間は、連邦、州、地方政府そしてアングロ・ケルティック的価値観の弱体化に反対するものを含むさまざまな圧力団体との折衝という新しい状況もあり、非常に挑戦的なものでした。私は研究所において、多文化教育、多文化放送、そして新移民のための職業問題、住宅、司法援助、高齢者、子供、女性への援助を含む到着後のプログラムとサービスについてのさまざまな研究計画に携わりました。

この時期にはオーストラリアでの政権交代があり、研究所においても多文化政策への異なるアプローチが反映されました。これらの変化のうち重要な側面は、新しい労働党政権が少数派に対して国の資源へのアクセスと公平さを強調したことでした。機会の平等に代わる結果の平等への重点は、異なるグループからなる社会のための差別修正政策の効果を巡る最近の議論を反映したものでした。オーストラリア多文化問題研究所における異なる政策アプローチと他の政治課題の両立をめぐる困難は、新しく選出された労働党政権が前の自由党・国民党政権が設置したこの研究所を閉鎖する原因となりました。

また私がメルボルン大学の応用経済社会研究所に所属した後、一九八九年に移った国の研究機関である移民人口問題研究所が同様の道を辿ったということは皮肉でした。その研究所は労働党政権によって移民に関する経済、社会、環境、国際的変化を研究するために設置され、一貫して移民は長期的に経済的利益をもたらすことを明らかにしていました。この研究所は、移民が失業を増加させ景気後退時に社会不安を引き起こすという意見を持つジョン・ハワード現首相率いる自由党・国民党政権によって廃止されました。

このような展開は、政策目標を達成するための社会学・経済学における研究と応用の矛盾を際立たせました。それは政府、産業界、他の既得権益からの外部資金に頼っているすべての研究の脆弱さを裏づけ、価値観に左右されない社会科学の可能性についての議論を思い起こさせます。ある意味では広く受け入れられ、証明可能なそして透明性のあるデータ収集の方法を使用することはそれらの困難を最小限にし、研究が政策と計画の公式化と評価を助けることを可能にすると思います。これは、研究者の間の問題解決へのアプローチにおける知識人の誠実さと専門家精神の必要性を求めています。

立命館アジア太平洋大学への期待

ビクトリア工科大学のアジア太平洋研究センターでの過去五年間は、特に楽しいものでした。そこでの仕事は、多くの個人的および専門的関心と一致しているともに、心理学、政治学、そして経済学での経験と、私の比較的広範囲な職業経験を基礎とした研究を可能にしました。こうした研究は、将来のアジア太平洋における成長と交流に影響を与えると思います。

特に、移民、観光、そして国際学生など国際間の人の移動について研究することができました。これらの分野での研究の多くは国際学生の受入れ側への影響に集中していましたが、このような移動の原因と過程の研究は、地域統合と相互依存の理解に直接寄与するという意味で重要です。

また、オーストラリアの発展過程において、アジア太平洋地域の近隣国との関係に影響を与えるさまざまな問題について積極的に研究し、オーストラリア政府に委託されたコンサルタント・リポートを作成しました。ここでの重要な点は、オーストラリアのアジア太平洋コミュニティの成長、多様化と統合、アジア太平洋地域内での文化的に多様で、経済的に公平な社会としてのオーストラリアの持続的な成長です。

最近、私は、国際移民から起こった地球的家族、社会、文化、経済のネットワークに大きな関心を寄せています。今までの多くの研究は、経済的関係を含む中国人の移動、中国人のアイデンティティ、東南アジアと東アジアの活気に満ちた中国人社会、太平洋岸の多文化の国々と中国との交錯についてでした。

これらの研究、特にコミュニティと国家を超えた関係に関する分野は、立命館アジア太平洋大学と相互依存関係にある他の教育機関にとって、重要な研究分野であると思います。

中国・東北財経大学と協力協定交換式

二月二十一日、春節で賑わう中国大連市において東北財経大学と協定交換式が行われました。交換式には、東北財経大学からは于洋学長、邱東副学長はじめ大学関係者、立命館からは、慈道裕治常務理事（立命館アジア太平洋大学副学長予定者）、仲上健一立命館アジア太平洋大学設置委員会事務局長、曹瑞林政策科学部常勤講師が列席し、式が厳粛に執り行われました。

東北財経大学は、一九五二年創立、学生数一万二千名、経済・経営系を中心に十二学部を擁する中国東北部を代表する名門大学です。これまで、立命館大学とは六年間にわたる研究交流が行われてきました。本協定にもとづいて、今後はさらに教員交流・学生交流・研究交流等が具体化されることになります。また、于洋東北財経大学学長より立命館アジア太平洋大学への期待と協力の申し出がありました。また、夕刻には、夏徳仁大連市副市長（前東北財経大学学長）主催の晩餐会も行われました。

大連市は、中国の都市のなかでも経済的にも環境的にも最も注目されている都市の一つであり、日本との関係も深い都市です。本協定を契機により深い交流が期待されています。

左から慈道裕治立命館常務理事、于洋東北財経大学学長

グエン・ミン・ヒエン ベトナム教育訓練省大臣へ 名誉博士号贈呈

昨年十二月二十一日、立命館大学において、グエン・ミン・ヒエンベトナム教育訓練省大臣（前ハノイ工科大学学長）への「名誉博士号贈呈式」が挙行されました。

ハノイ工科大学は、工学を中心とする総合名門大学であり、本学とは、一九九一年以来、研究交流や教員交流、学生交流を盛んに行っており、九六年には協力協定を締結しています。また、ベトナム教育訓練省とは、一九九八年に交流協定を締結し、ベトナムから相当数の留学生を立命館アジア太平洋大学へ受け入れるべく具体化が進んでいます。

グエン・ミン・ヒエン氏が、工学の発展や高等教育の国際化、アジア太平洋地域における教育関連機関間の国際関係の構築に果たされた功績は多大なものであり、かつ本学の国際化の推進に対する格別の貢献を讃え、立命館大学名誉博士号の贈呈となりました。

左から坂本和一立命館アジア太平洋大学学長予定者、グエン・ミン・ヒエン氏、大南正瑛前立命館総長

ベトナムの新聞「Nhân Dân」紙 1998年12月21日より

BỘ TRƯỞNG GIÁO DỤC VÀ ĐÀO TẠO NGUYỄN MINH HIỂN ĐƯỢC NHẬT BẢN TRAO TẶNG DANH HIỆU TIẾN SĨ DANH DỰ

Nhận lời mời của Giáo sư M.Ô-na-mi, Hiệu trưởng Trường đại học châu Á - Thái Bình Dương Rít-xu-mây-can ở Ki-ô-tô, Nhật Bản, ngày 21-12, Giáo sư, tiến sĩ Nguyễn Minh Hiển, Ủy viên T.Ư Đảng CS Việt Nam, Bộ trưởng Giáo dục và Đào tạo nước ta đã thăm và dự lễ trao tặng danh hiệu Tiến sĩ danh dự do Trường đại học châu Á - Thái Bình Dương Rít-xu-mây-can ở Ki-ô-tô phong tặng Giáo sư Bộ trưởng.

Phát biểu ý kiến tại buổi lễ, Giáo sư Hiệu trưởng M.Ô-na-mi ca ngợi những thành tựu to lớn mà nhân dân Việt Nam đã đạt được trong sự nghiệp đổi mới những năm vừa qua, nhất là trên lĩnh vực giáo dục và đào tạo và đánh giá cao những đóng góp của Bộ trưởng Nguyễn Minh Hiển với sự nghiệp giáo dục của Việt Nam cũng như trong nỗ lực thúc đẩy tăng cường quan hệ hợp tác về giáo dục và đào tạo giữa hai nước và giữa các trường đại học ở Việt Nam và Nhật Bản.

Trong lời phát biểu sau khi đón nhận danh hiệu Tiến sĩ danh dự, Bộ trưởng Nguyễn Minh Hiển bày tỏ sự cảm ơn chân thành và đánh giá cao quyết định mới nhất về hợp tác và giúp đỡ Việt Nam trên lĩnh vực giáo dục và đào tạo của Trường đại học châu Á - Thái Bình Dương Rít-xu-mây-can, theo đó, kể từ tháng 4-2000 mỗi năm trường nhận đào tạo giúp Việt Nam 50 sinh viên về các ngành quản lý kinh tế, luật, công nghệ và khoa học cơ bản. Bộ trưởng cũng bày tỏ hy vọng rằng hợp tác trên lĩnh vực giáo dục và đào tạo giữa Việt Nam và Nhật Bản nói chung cũng như giữa đại học Rít-xu-mây-can với các trường đại học Việt Nam trong những năm tới sẽ ngày càng mở rộng và phát triển hơn nữa.

Dự lễ, còn có ông Lê Ngọc Thứ, Tổng lãnh sự Việt Nam tại Ô-xa-ca cùng đông đảo giáo sư thuộc Trường đại học châu Á - Thái Bình Dương Rít-xu-mây-can, nhiều nghiên cứu sinh, sinh viên Việt Nam đang nghiên cứu và học tập tại thành phố Ki-ô-tô, Nhật Bản.

立命館大学 東京オフィスオープン

去る一月二十六日、かねてからの念願でありました「立命館大学東京オフィス」の開所式を執り行いました。立命館大学にとりましてこのオフィスは、国内では大阪オフィス、大分・別府事務所についで三番目、海外を加えますと韓国のソウル、インドネシアのジャカルタ事務所についで五番目の事務所ということになります。

開所式は、新装なった事務所内において、来賓として和田龍幸経済団体連合会専務理事、河原四郎立命館大学校友会長にご臨席いただき、学園から川本八郎理事長、長田豊臣総長、坂本和一副総長（立命館アジア太平洋大学学長予定者）をはじめ主要役職者の出席のもと挙行され、和田龍幸経済団体連合会専務理事からご祝辞を頂戴いたしました。

また、佐々木正峰文部省高等教育局長、鳥居泰彦日本私立大学連盟会長をはじめ各界から数多くの祝電が寄せられました。経済界からは、今井敬経済団体連合会会長、平岩外四東京電力相談役、豊田章一郎トヨタ自動車会長、樋口廣太郎アサヒビール名誉会長、末松謙一さくら銀行常任顧問をはじめ多くの方々から丁重なるご祝電をいただきました。

東京オフィスは、①首都圏における、立命館アジア大学にご支援ご協力いただいているアドバイザリー・コミッティ委員や幹事の皆様方との緊密なネットワークの構築、②首都圏における本学学生の就職支援、③東京在住・勤務の本学卒業生とのネットワークの強化などを当面の担うべき役割としてスタートしました。開所以来三ヶ月間の来訪者は、企業関係者、学生・卒業生を合わせて千二百名を超え、当初予想を大きく上回っています。一方、東京オフィスから企業及び各機関に訪問させていただいた件数は二百件にのぼります。

これから就職シーズンのピークを迎える時期には学生の来訪者は飛躍的に増加するものと予測され、「立命館大学東京オフィス」開設の効果がさまざまな分野で現れてくるものと期待しています。

〒103-0028
東京都中央区八重洲1-3-19辰沼建物ビル8階
立命館大学 東京オフィス
TEL. 03-5204-8611 FAX. 03-5204-8712

アドバイザリー・コミッティの皆様方へ

皆様にはご高承のように、立命館アジア太平洋大学は従前の日本の大学と異なりアドバイザリー・コミッティの委員を中心とした各界の皆様に支えられて開設し、世界標準の真に国際的な大学を目指しております。そういう意味でも、開学までは勿論ですが、開学後も、委員や幹事の方々とのネットワークが充全に機能していくことは、新大学にとって大変重要になると考えています。委員及び幹事の方々には、日常的にご助言・ご指摘を頂戴することはもとより、本年度は、立命館アジア太平洋大学内に設置するアドバイザリー・コミッティ・ライブラリーへの資料のご提供のお願い、また、開学後には、インターンシップや国際感覚をもった卒業生の就職等についてご指導とご協力を頂きたく考えております。

今後は、開学に向けての準備に万全を期すとともに、新しい大学が所期の目標を具体化するためにもアドバイザリー・コミッティ委員、並びに幹事の方々のご協力をお願いいたしたく存じます。特に経済界からの委員の過半数の方々と各国の駐日大使がおられる首都・東京におきましては、それに必要な本学の体制が必要との判断から東京オフィスを開設させていただきました。

立命館学園の関係者一同、アドバイザリー・コミッティ委員の先生方はじめ国内外の皆様のご期待に添えますよう決意も新たに邁進いたす所存でございますので、今後とも忌憚のないご意見ご批判を賜りますようお願い申し上げます。

立命館大学企業懇談会
～福岡で初めての開催

立命館大学では、毎年秋から翌年にかけて「立命館大学企業懇談会」を開催しています。この懇談会は、卒業生の就職や産学協同はじめさまざまな形で日頃お世話になっております各企業の方々と、本学園役職者・各学部教授をはじめ大学関係者との情報交換や懇談の場として位置づけています。

九八年度は、十一月の大阪企業懇談会、十二月の東京企業懇談会につづき、本年二月二十三日、初めて福岡で開催しました。立命館アジア太平洋大学の開学を来年四月に控えておりますとともに、本学には現在、九州出身の学生が約二千名在籍しており、九州は本学にとっても身近でかつ重要な地域といえます。

当日は、社団法人九州・山口経済連合会会長（九州電力株式会社会長）大野茂様をご来賓としてお迎えし、ご挨拶ならびに乾杯のご発声の労をおとりいただきました。懇談会には、アドバイザリー・コミッティ委員の先生方の所属企業・団体をはじめ多くのご出席をいただき、約百社、百五十名の皆様方のご出席を得て、盛大に執り行うことができました。

懇談では、立命館大学ならびに立命館アジア太平洋大学に対し、さまざまなご要望やご期待のお言葉を頂戴し、関係者一同、さらなる大学創造・新大学事業完遂への決意を新たにし、約二時間の会を終えました。

福岡企業懇談会　ご挨拶要旨

（社）九州・山口経済連合会　会長
九州電力株式会社　会長
大野　茂

立命館大学は、学祖・西園寺公望の「自由主義」「国際主義」を建学の精神に設立され、その志を継承・発展してきたことは皆さまご高承のとおりでございます。来年二〇〇〇年には学園創立百周年を迎えられると伺っておりますが、今日に至るまで数多くの優秀な人材を輩出され、当九州地域においても多くの卒業生の方々が各方面において活躍されております。

その学園の歴史と伝統を踏まえて、今回新たに、立命館アジア太平洋大学（APU）が創設され、大分県、別府市のご協力のもと来年四月に開学される運びとなりました。

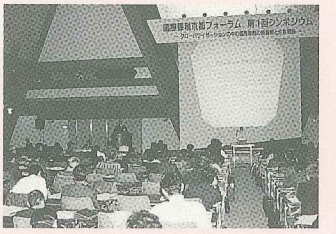
この立命館アジア太平洋大学は、アジア太平洋地域の持続的で平和的な発展と共生を担う国際的人材の育成を目標に設立される「アジア立」大学といえます。

ご存じのとおり、九州は地理的に、そして歴史的にもアジア諸国に近いことから、九州・山口経済連合会としても「アジアと一体化して発展する九州」を目指し、各地域と様々な交流や活動を行っております。世界の成長センターと呼ばれるアジア地域とは、経済活動のみならず、文化・教育などの面で今後更に交流を深めていくことが必要であると考えております。

そのような中で、立命館アジア太平洋大学が設立され、グローバル社会に対応できる創造力と国際的視野をもった人材を育成されますことに、私どもも大きな期待を寄せておりますとともに、九州全体として応援できればと考えております。

二〇〇四年には第一期生が誕生する予定でございますが、九州地域内の企業との産学連携あるいは就職の面で、本日ご出席の皆さまと新たな結びつきが生まれることも考えられますので、宜しくご協力のほどお願いいたします。

「国際課税京都フォーラム第一回シンポジウム」を開催



一月二十八日から二日間、国立京都国際会館において「国際課税京都フォーラム第一回シンポジウム」を開催しました。今回の企画は、大蔵省・経済団体連合会・日本税理士会連合会など多数の機関からご後援ご協賛いただき、関西経済連合会・大阪商工会議所・京都商工会議所と立命館大学の共催としておこなったものです。冒頭に関西経済連合会の新宮康男会長からご挨拶をいただき、シンポジウムでは「グローバライゼーションの中の国際税制の新展開と企業戦略」をテーマとして、日本とアメリカを代表する各分野の専門家がそれぞれの立場から意見を述べられ、活発な議論がおこなわれました。参加者も、大蔵省・国税庁・通産省等の官庁関係者、企業の国際税務担当者、弁護士・公認会計士・税理士、研究者・大学院生など総勢二百八十名に及び、内容的にも充実したものであったと各方面より評価いただきました。

1月28日のオープニング・基調講演

- ●主催者挨拶　実行委員長　立命館大学教授　永尾正章
  関西経済連合会　会長　新宮康男
- ●国際課税京都フォーラム　世話人会代表挨拶　学習院大学教授　金子宏
- ●基調講演1「わが国国際課税の当面する重点課題」　国税庁　国税審議官　藤倉基晴
- ●基調講演2「国際課税の当面する重点課題」
  アメリカ合衆国　内国歳入庁　前主席調査官　マイケル・パットン
- ●コメント　関西大学教授　村井正
  中央クーパース・アンド・ライブランド国際税務事務所　会長　五味雄治

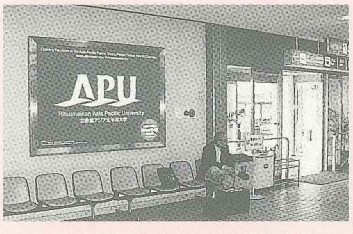
APU開学に向けカウントダウンボード設置

朝日新聞社提供

四月二日、二〇〇〇年四月の開学に向けたカウントダウンボードが、立命館大学のある関西と別府を結ぶ別府国際観光港の関西汽船フェリー乗り場に設置されました。ボードは、関西汽船と県・市などの六十一団体で構成されている「立命館アジア太平洋大学設置期成同盟会」のご厚意によるものです。縦一・八メートル、横二・七メートルの大きさで、横には各建物の完成予想図など九枚のパネルを掲示しています。

また、四月一日には、大分空港・JR別府駅、そして立命館大学大阪オフィスのある京阪電車淀屋橋駅にもAPUを紹介する看板がお目見えしています。

大分空港



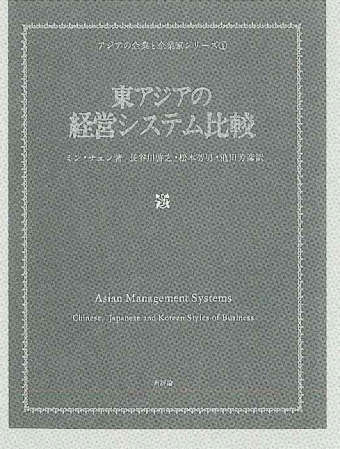
JR別府駅

B O O K R E V I E W

ブック・レビュー

『東アジアの経営システム比較』

ミン・チェン著（長谷川啓之・松本芳男・池田芳彦訳）／新評論



本書は、東アジアの経営システム、すなわち資本主義的な華人経営、急速に変化しつつある中国本土の経営システム、日本の経営システム、韓国の経営システムの4つの主要な経営システムの比較を行なっている非常に興味深い著作である。訳者によれば、著者のミン・チェン氏は中国系アメリカ人であり、サンダーバードアメリカ国際経営大学院においてアジアのビジネス環境、国際競争力とアジアの経営システムなどについて教えるとともに、アメリカ、中国、ロシアなど多数の国でコンサルティングをするなど世界を駆け巡っているとのことである。

全体の構成は、第Ⅰ部「概念的枠組み」、第Ⅱ部「中国系企業の経営システム」、第Ⅲ部「日本と韓国の経営システム比較」、第Ⅳ部「異なる経営システムへの対応」となっている。全体を通して、東アジアの主要な経営システムの、文化的・歴史的源泉、活動環境、組織構造や管理過程の顕著な特徴、競争戦略など様々な側面について分析している。

結論は次のようである。これらの経営システムの類似点は儒教の文化的伝統的領域に集中しており、個人間関係の調和、社会や組織の階層構造、家族の重要性、権威主義の普及、温情主義と人格主義、相互義務のシステム、クアンシ・ネットワークの普遍性などが含まれる。相違点は所有形態、リーダーシップや意思決定過程への参加、市場戦略などで見られる。さらに、欧米と東洋の経営システムの相違には個人主義と共同体主義など価値の一般的相違が反映しているが、現実の経営過程は複雑であり、過度の一般化は危険である。いずれにせよ、アジアの経営システムは、過去数十年間に欧米の経営システムから学習し、近代的経営方法を自らの文化的で、社会的に影響された経営システムに結び付けてきた。

本書は「アジアの企業と企業家シリーズ」の一冊目として出されたものであり、こうした著作が日本においても次々に出版されることがアジアでのビジネスを理解する上で重要である。

発行：学校法人立命館
〒603-8577京都市北区等持院北町56ー1
TEL.075-465-8366（理事長室）